

点字新聞の語彙分析

— 『点字毎日』 2011 年発行分による頻度調査を中心に —

羽山 慎亮 (名古屋大学大学院博士後期課程)

要旨

漢字を使わずに日本語点字で書かれた新聞『点字毎日』の語彙はどのような特徴をもつかについて、2011 年発行分の紙面における頻度調査をもとに分析した。その結果、和語のみでみると一般紙(『毎日新聞』)の頻出語と大きな相違はないが、漢語と外来語においては各紙面の内容を反映する語が上位を占めることがわかった。一方、漢字を使わないという点に着目して紙面中の同音異義語の数を調査したところ、『点字毎日』も『毎日新聞』と同じ程度に同音異義語が存在した。このことから、明らかに区別ができなかったり誤解が生じるとき以外は、漢語あるいは同音異義語のある語を避けて言い換えるということは特に行なわれていないことが確認された。同音異義語であっても文脈で判断できる、あるいは背景知識をもっていれば意味を想起できると判断されたものとみられるが、読者にとって実際にそれが可能となっているかどうかについては今後の調査課題とした。

1. はじめに

現在一般に使用されている点字は、1 字が縦 3 点・横 2 点、合計 6 点の組み合わせで表される点字であり、フランスのパリ訓盲院に在籍していたルイ・ブライユが 1825 年に考案したものを起源とする。日本語を読み書きするために使われる「日本語点字」¹は、この 6 つの点のうち 3 つを母音に、残りの 3 つを子音に対応させて母音と子音の組み合わせで日本語の仮名を表すという方法が取られている。これは東京盲啞学校の教員であった石川倉次が考案したものであり、1901 年には「日本訓盲点字」として『官報』に掲載された。

このように基本的に仮名 1 字に相当する日本語点字で書かれた文章は、仮名専用の文章と形式上は同じである。ただし、点字文は一般には、日本点字委員会編(2001)『日本点字表記法 2001 年版』に則した表記(いわゆる「点字かなづかい」)で記される。この表記法は「現代仮名遣い」とはやや異なり、助詞の「は」「へ」はそれぞれ発音通り「わ」「え」とし、長音のうち「現代仮名遣い」では「う」と記すものには長音符を用いるとしている。よって、例えば「私は」は「わたしわ」、「学校」は「がっこう」と書くこととなる。また、ことばの区切りがわかるように、主に文節ごとに分かち書きがなされる。

この日本語点字によって書かれた新聞として、毎日新聞社が発行する『点字毎日』(毎週日曜日発行)がある²。『点字毎日』は 1922 年に『點字大阪毎日』として大阪毎日新聞社により創刊された。1943 年に『点字毎日』と改題し、現在も発行を続けている。本稿 3.1 に詳述するが、『点字毎日』は単に『毎日新聞』の点字版というわけではなく、毎日新聞社点

¹ 一般には「日本語点字」あるいは単に「点字」と呼ばれることも多いが、本稿では日本語を記す点字という意味を明示するために「日本語点字」と称する。なお、点字に対して、漢字や仮名のように目で読む文字を一般に「墨字(すみじ)」と呼ぶ。

² 過去には、『あけぼの』(日本初の点字新聞、1905 年創刊)などいくつかの点字新聞が発行されてきた。点字新聞の歴史については、羽山(2009)に詳しく記している。

字毎日部が独自に取材・執筆した視覚障害関連のニュース記事やインタビュー記事などを中心に構成された新聞である。

本稿では、視覚障害関連のニュースを扱う、いわば専門紙ともいえる『点字毎日』の語彙の特徴を示す。同時に、漢字を使わずに書かれた新聞であるということにも焦点を当てて、新聞記事の表記と語彙の関連についても考察する。

2. 先行研究

近年の新聞の語彙研究としては、佐竹・岸本（1998）が『朝日新聞』『毎日新聞』『読売新聞』の3紙の一面について「1997年1月～12月における、休刊日を除くすべての日の朝刊から、各日5文ずつを無作為抽出」して調査を行なっている³。

点字新聞については、羽山・中野（2015）で『点字毎日』と『毎日新聞』の記事を語種比率および品詞比率という量的な観点から分析している。その結果、両紙で大きな差異はみられず、どちらも従来指摘されてきた新聞文章の特徴を多くもっていることが明らかにされた。しかしながら、質的な差異については触れておらず、点字新聞の語彙的特徴が十分に示されたとはいえない。羽山（2014）では、『点字毎日』の記事の中でキーワードとなっている語のほとんどは身近な語（親密度が高い語）⁴であるという指摘をしているが、調査範囲が限られており、全体的な傾向は未だ明らかになっていない。

本稿では佐竹・岸本（1998）の調査を参考としながら、点字新聞の語彙的特徴を頻度調査によって分析することで、一般紙との質的な異同を示していくこととする。

3. 頻度調査

3.1 調査対象

『点字毎日』の記事は視覚障害関連のニュース欄（「ないがい もーかい にゅーす」⁵）が中心となっており、一般ニュースは最終ページ近くにダイジェストのような形で掲載される（「まち くに せかい」）。そのほか、点字毎日部記者のコラムである「きんぼー えんぶん」や連載記事（「わたしの しごと」など）といったものが掲載され、「まち くに せかい」欄以外は点字毎日部が独自に取材・編集した記事で構成される。

このうち、本稿の調査では、視覚障害関連のニュースを扱った「ないがい もーかい にゅーす」欄を対象とする。この欄は毎号最初に掲載される欄であり、一般紙でいう一面や総合面に相当するものである。

具体的な対象紙面は、2011年発行分に掲載された「ないがい もーかい にゅーす」欄の記事全文（本文のみ）とする⁶。ただし、「ひと」および名称等の列挙が大部分を占めることが多い記事（「しりょー」、「せいかつ さぼーと じょーほー」、障害者団体等の大会予定）は対象から除いた。さらに、対象となる記事の中でも1段落すべてが名称等の列挙のみで構成されている部分は除外した。

³ 佐竹・岸本（1998:5）。

⁴ 国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（「少納言」）内を検索し、出現件数が多いほど「身近な語」であると捉えている。

⁵ 本稿では『点字毎日』から引用する際、点字を平仮名にして示す。かなづかいや分かち書きは原文に従う。

⁶ 『点字毎日』の記事は、『点字毎日』フロッピー版より閲覧した。

また、『点字毎日』と対照させるため、2011年に発行された『毎日新聞』東京本社版朝刊一面を6日おきに取り出し、「社告」「余録」⁷および箇条書きの部分を除く全文（本文のみ）を調査対象とした⁸。

3.2 調査方法

3.1で示した対象紙面について、語の出現頻度を調査するにあたり、記事本文を形態素解析辞書「unidic-mecab 2.1.2」⁹を用いて「短単位」に分割した。『点字毎日』の記事については点字文を漢字仮名交じり文にした上で解析した¹⁰。本稿では「unidic-mecab 2.1.2」の解析結果に従い、「1短単位」を「1語」とみなすこととする。短単位とは、和語・漢語は2つの形態素の組み合わせごと、外来語は1つの形態素ごとに1単位とすることを原則とした分割方法である¹¹。なお、「unidic-mecab 2.1.2」による解析の結果、誤解析とみられる部分も散見されたが、実際の解析精度から頻度調査に大きな影響を与えることはない¹²と判断し¹³、修正はしなかった¹³。

上記の方法で得られたデータをもとに、両紙における自立語¹⁴の出現頻度を調査した。頻度を求めるにあたっては、解析結果において「語彙素」と「語彙素読み」が一致するものを同一語とした。語彙素というのは、「国語辞典の見出し語に相当する」¹⁵ものであり、表記や語形の違いは考慮されない（例えば、「玉葱」「たまねぎ」「玉ネギ」という異表記はすべて語彙素「玉葱」、「やはり」「やっぱり」という異語形はすべて語彙素「矢張り」として認定される。なお、語彙素は漢字表記で出力される）。ここで同一語の認定の際に問題になるのが、漢字が同じで読みが異なる語彙素は表面的には区別がつかないことである（例えば、「きょう」と読む語彙素「今日」と「こんにち」と読む語彙素「今日」）。そのため、語彙素読み的一致も同一語を認定するための要素とした。

本稿では、対象紙面に出現した語を出現頻度が高い順に並べたうえで、『点字毎日』『毎日新聞』各紙における上位50語および語種別（和語、漢語、外来語）での上位20語をもとに考察を行なう。

3.3 調査結果

調査の結果、各紙において以下の数の自立語が取り出された（語数は下2桁を切り捨てて表示）。ただし、人名等で誤解析されたものも含むため、必ずしも厳密な数値ではない。

⁷ 一面の下部に掲載されるコラム。『朝日新聞』『天声人語』、『中日新聞』『中日春秋』に相当する。

⁸ 『毎日新聞』の記事は、毎日新聞社データベース「毎索」より閲覧した。

⁹ 国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」構築のために作成されたもので、ウェブサイト上に公開されている（<http://sourceforge.jp/projects/unidic/>）。

¹⁰ 解析辞書の構造上、より正確な結果を得るためには「一般的な」漢字仮名交じり文で書かれている必要がある。解析の精度については小木曾（2014:103-111）に詳述されている。

¹¹ 詳細な認定規定は、国立国語研究所コーパス開発センターウェブサイト「書き言葉均衡コーパス」に記載がある（http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/morphology.html）。

¹² 特に誤解析が目立ったのが人名であるが、高頻度で出現する人名はなく、調査結果には影響を与えないと判断した。

¹³ ただし、可能な限り誤解析を避けるため、『毎日新聞』の記事にある交ぜ書きの一部（「けん制」など）は事前に漢字表記にした（なお、実際には交ぜ書きのままでも正しく解析される）。

¹⁴ 助詞、助動詞、接頭辞、接尾辞、数詞、記号を除いたもの。なお、「unidic-mecab 2.1.2」では小数点は「名詞」とみなされるが、これも「記号」として除外した。

¹⁵ 小木曾（2014:101）。

『点字毎日』: 延べ語数 約 66,000 語 異なり語数 約 6,700 語

『毎日新聞』: 延べ語数 約 49,400 語 異なり語数 約 6,800 語

3.3.1 度数上位 50 語

各紙における上位 50 語を以下の表 1 に示す。複数の読み方が考えられる語彙素については、筆者により読み仮名を併記した。

表 1: 各紙における度数上位 50 語 (塗りつぶしは両紙で共通する語)

点字毎日					毎日新聞				
順位	語	品詞	度数	ハ-ミル	順位	語	品詞	度数	ハ-ミル
1	為る	動詞	3829	58.0	1	為る	動詞	3079	62.3
2	障害	名詞	1421	21.5	2	居る(いる)	動詞	759	15.4
3	居る(いる)	動詞	971	14.7	3	日(いち)	名詞	396	8.0
4	視覚	名詞	645	9.8	4	事(こと)	名詞	357	7.2
5	支援	名詞	539	8.2	5	有る	動詞	352	7.1
6	事(こと)	名詞	517	7.8	6	成る	動詞	345	7.0
7	月(がつ)	名詞	495	7.5	7	月(がつ)	名詞	334	6.8
8	会(かい)	名詞	456	6.9	8	年(ねん)	名詞	322	6.5
9	有る	動詞	444	6.7	9	県	名詞	253	5.1
10	成る	動詞	417	6.3	10	日本	名詞	233	4.7
11	つく	動詞	395	6.0	11	市(し)	名詞	230	4.7
12	日本	名詞	350	5.3	12	首相	名詞	224	4.5
13	市(し)	名詞	345	5.2	13	原発	名詞	215	4.3
14	日(いち)	名詞	312	4.7	14	因る	動詞	195	3.9
15	言う	動詞	285	4.3	15	無い	形容詞	182	3.7
16	行う	動詞	278	4.2	16	避難	名詞	178	3.6
17	為	名詞	277	4.2	17	政府	名詞	177	3.6
18	出来る	動詞	267	4.0	18	つく	動詞	176	3.6
19	福祉	名詞	260	3.9	19	パーセント	名詞	166	3.4
20	情報	名詞	244	3.7	19	言う	動詞	166	3.4
21	県	名詞	241	3.7	21	因	名詞	165	3.3
21	必要	名詞	241	3.7	22	電力	名詞	160	3.2
23	年(ねん)	名詞	237	3.6	23	為	名詞	157	3.2
24	其の	連体詞	232	3.5	24	東京	名詞	152	3.1
25	利用	名詞	231	3.5	25	事故	名詞	142	2.9
26	学校	名詞	229	3.5	26	震災	名詞	138	2.8
27	サービス	名詞	227	3.4	27	案	名詞	134	2.7
28	法	名詞	224	3.4	28	会(かい)	名詞	131	2.7
29	因る	動詞	219	3.3	29	出来る	動詞	128	2.6

点字毎日				
順位	語	品詞	度数	パーミル
30	絵（え）	形状詞	209	3.2
31	ハーゼット	名詞	208	3.2
32	盲	名詞	204	3.1
33	開く	動詞	203	3.1
34	点字	名詞	199	3.0
35	事業	名詞	190	2.9
36	他（ほか）	名詞	183	2.8
36	制度	名詞	183	2.8
38	教育	名詞	177	2.7
39	活動	名詞	176	2.7
39	生活	名詞	176	2.7
41	東京	名詞	173	2.6
42	求める	動詞	172	2.6
43	人（ひと）	名詞	170	2.6
44	此の	連体詞	169	2.6
45	同	名詞	166	2.5
46	施設	名詞	165	2.5
47	ホーム	名詞	163	2.5
48	全国	名詞	162	2.5
49	岡	名詞	161	2.4
50	参加	名詞	157	2.4

毎日新聞				
順位	語	品詞	度数	パーミル
30	福島	名詞	126	2.5
31	民主	名詞	121	2.4
32	代表	名詞	120	2.4
33	元（もと）	名詞	114	2.3
33	原子	名詞	114	2.3
35	示す	動詞	111	2.2
36	時（じ）	名詞	110	2.2
37	調査	名詞	109	2.2
38	放射	名詞	107	2.2
38	絵（え）	形状詞	107	2.2
40	復興	名詞	105	2.1
41	キロ	名詞	102	2.1
42	求める	動詞	100	2.0
42	見る	動詞	100	2.0
44	可能	名詞	99	2.0
45	機	名詞	98	2.0
45	東（ひがし）	名詞	98	2.0
47	受ける	動詞	94	1.9
48	方針	名詞	91	1.8
49	税	名詞	89	1.8
49	問題	名詞	89	1.8

表1の項目のうち、度数とパーミル¹⁶は、誤解析の修正を行なった場合は多少異なる値になる可能性があることを記しておく（以降に示す表についても同じ）。

具体的に語をみると、両紙ともに「為る」がもっとも多く、「居る（いる）」「事（こと）」といった語が上位にあるが、これらの語については佐竹・岸本（1998）でも「新聞の語彙調査では常に上位を占めるものである」¹⁷と指摘されている。また、『毎日新聞』の上位11語までが『点字毎日』でも上位に入っている語であり、これらについても、新聞というメディアに共通して使われる語であると考えられる。特に、「年」「月」「日」といった日付に使われる語や「県」「市」といった場所を表す語が多いことには、報道文章としての特徴が表れているといえる。

『点字毎日』のみに特徴的な点は、上位5語までに「障害」「視覚」「支援」という、『毎日新聞』では上位にない語が入っていることである。視覚障害関連のニュースを扱った紙面であるため、やはり「視覚」「障害」が多く登場することが確認できる。「支援」につい

¹⁶ 「当該語の度数／自立語の総語数×1000」により算出したもので、当該語が自立語のうちどのくらいの割合を占めるかを表す。

¹⁷ 佐竹・岸本（1998:15）。

ては「特別支援教育」「移動支援」などの表現で用いられており、これも視覚障害に密接に関わる語であることが理解できる。

『毎日新聞』のほうに着目すると、「原発」「避難」「震災」といった、東日本大震災に関する語が上位に入っている。本調査で対象期間とした2011年は東日本大震災が発生した年であり、一面にも関連記事が多く掲載されたためである。これらの語については2011年の新聞紙面に特徴的な調査結果であるといえる。

そのほか、『点字毎日』のみに「行う」「其の」、『毎日新聞』のみに「無い」が上位に入っている。しかし、上位30語までに入っている和語のうち、両紙で共通しない語は少なく、目立つのは先に挙げたような漢語である。そこで、出現頻度を語種別に整理することでより明確に両紙の特徴が表れると考え、次節以降では「和語」「漢語」「外来語」の語種別に上位20語を提示する。

3.3.2 漢語における度数上位20語

まずは漢語について、上位20語を以下の表2に示す。

表2：各紙における漢語の度数上位20語（塗りつぶしは両紙で共通する語）

点字毎日					毎日新聞				
順位		語	度数	パーセント	順位		語	度数	パーセント
語種	全体				語種	全体			
1	2	障害	1421	21.5	1	3	日	396	8.0
2	4	視覚	645	9.8	2	7	月(がつ)	334	6.8
3	5	支援	539	8.2	3	8	年	322	6.5
4	7	月(がつ)	495	7.5	4	9	県	253	5.1
5	8	会	456	6.9	5	11	市	230	4.7
6	13	市	345	5.2	6	12	首相	224	4.5
7	14	日	312	4.7	7	13	原発	215	4.3
8	19	福祉	260	3.9	8	16	避難	178	3.6
9	20	情報	244	3.7	9	17	政府	177	3.6
10	21	県	241	3.7	10	21	円	165	3.3
10	21	必要	241	3.7	11	22	電力	160	3.2
12	23	年	237	3.6	12	25	事故	142	2.9
13	25	利用	231	3.5	13	26	震災	138	2.8
14	26	学校	229	3.5	14	27	案	134	2.7
15	28	法	224	3.4	15	28	会	131	2.7
16	30	様	209	3.2	16	31	民主	121	2.4
17	32	盲	204	3.1	17	32	代表	120	2.4
18	34	点字	199	3.0	18	33	原子	114	2.3
19	35	事業	190	2.9	19	36	時	110	2.2
20	36	制度	183	2.8	20	37	調査	109	2.2

前の節で触れたように、漢語については日付や場所を表す語以外はほとんど共通せず、各紙の内容が反映された結果となっている。

3.3.3 外来語における度数上位 20 語

次に外来語(アルファベット表記の語も含む)について、上位 20 語を以下の表 3 に示す。

表 3：各紙における外来語の度数上位 20 語 (塗りつぶしは両紙で共通する語)

点字毎日					毎日新聞				
順位		語	度数	パーミル	順位		語	度数	パーミル
語種	全体				語種	全体			
1	27	サービス	227	3.4	1	19	パーセント	166	3.4
2	31	パーセント	208	3.2	2	41	キロ	102	2.1
3	47	ホーム ¹⁸	163	2.5	3	135	ミリシーベルト	48	1.0
4	91	センター	100	1.5	4	147	メートル	46	0.9
5	104	マッサージ	87	1.3	5	280	エネルギー	30	0.6
6	147	チーム	66	1.0	6	292	ベクレル	29	0.6
7	184	ボランティア	56	0.8	7	305	グループ	28	0.6
8	212	ニーズ	51	0.8	7	305	デモ	28	0.6
9	220	テーマ	50	0.8	9	451	ドル	21	0.4
10	233	シンポジウム	47	0.7	10	474	テロ	20	0.4
11	252	DAISY ¹⁹	45	0.7	11	521	メーカー	18	0.4
12	286	NPO	40	0.6	12	576	キロワット	16	0.3
12	286	グループ	40	0.6	12	576	リスク	16	0.3
14	317	グループ	37	0.6	14	618	iPS	15	0.3
15	327	ブロック	36	0.5	14	618	データ	15	0.3
16	345	ケア	34	0.5	14	618	ユーロ	15	0.3
16	345	テレビ	34	0.5	17	676	セシウム	14	0.3
16	345	フリー	34	0.5	17	676	ミリ	14	0.3
19	373	コミュニケーション	32	0.5	17	676	レベル	14	0.3
20	404	CD	30	0.5	20	731	ケース	13	0.3
20	404	スポーツ	30	0.5	20	731	コスト	13	0.3
20	404	ページ	30	0.5	20	731	manifesto	13	0.3
20	404	リハビリテーション	30	0.5	20	731	グループ	13	0.3

¹⁸ 「グループホーム」あるいは「ホームページ」という表現での使用もあるが、駅の「ホーム」という意味での使用も多かった。ホームに視覚障害者が転落した事故およびその対策としてのホーム柵やホームドアの設置に関する記事が掲載されたためである。

¹⁹ Digital Accessible Information System の略で、「デイジー」と読む。デジタル録音図書の国際標準規格のことで、圧縮技術を用いることによって 1 枚の CD に 50 時間以上の収録が可能となる。この技術を用いた「デイジー図書」が現在の録音図書の主流となっている。

外来語についても両紙で共通するものは少なく、各紙面で扱われた記事内容が反映されているといえる。さらに、両紙における違いとしては、外来語での度数20位の語の全体順位をみると『点字毎日』では404位であるのに対し、『毎日新聞』では731位にまで下がる。それほど『点字毎日』は『毎日新聞』に比べて外来語を多く使用しているということである。羽山・中野(2015)による語種比率の調査では、『点字毎日』「ないがい もーかい にゅーす」欄の外来語の割合は『毎日新聞』一面に比べて高いことが示されており、本調査の結果もそれと一致するものとなった。

3.3.4 和語における度数上位20語

最後に和語について、上位20語を以下の表4に示す。なお、語は平仮名で表記した。

表4：各紙における和語の度数上位20語（塗りつぶしは両紙で共通する語）

点字毎日					毎日新聞				
順位		語	度数	パーミル	順位		語	度数	パーミル
語種	全体				語種	全体			
1	1	する	3829	58.0	1	1	する	3079	62.3
2	3	いる	971	14.7	2	2	いる	759	15.4
3	6	こと	517	7.8	3	4	こと	357	7.2
4	9	ある	444	6.7	4	5	ある	352	7.1
5	10	なる	417	6.3	5	6	なる	345	7.0
6	11	つく	395	6.0	6	14	よる	195	3.9
7	15	いう	285	4.3	7	15	ない	182	3.7
8	16	おこなう	278	4.2	8	18	つく	176	3.6
9	17	ため	277	4.2	9	19	いう	166	3.4
10	18	できる	267	4.0	10	23	ため	157	3.2
11	24	その	232	3.5	11	29	できる	128	2.6
12	29	よる	219	3.3	12	33	もと(元)	114	2.3
13	33	ひらく	203	3.1	13	35	しめす	111	2.2
14	36	ほか	183	2.8	14	42	もとめる	100	2.0
15	42	もとめる	172	2.6	14	42	みる	100	2.0
16	43	ひと	170	2.6	16	45	ひがし	98	2.0
17	44	この	169	2.6	17	47	うける	94	1.9
18	51	しめす	156	2.4	18	51	おる	87	1.8
19	53	また	148	2.2	19	64	この	76	1.5
20	60	ない	136	2.1	19	64	ばあい	76	1.5

漢語や外来語の場合とは異なり、和語では両紙で共通する語が半数以上を占める。特に上位5語が「する」「いる」「こと」「ある」「なる」と続くのはまったく同じである。全体的にみても、記事の内容を反映しているのは『毎日新聞』の16位「ひがし」(「東日本大震

災」など) くらいであり、ほとんどは新聞記事一般に共通して使われる、基本的な語であるといえる。

3.3.5 両紙における同音異義語

以上の頻度調査により、各紙面の内容を反映した特徴的な語は漢語および外来語として多く現れることがわかった。よって、これらの漢語・外来語の理解が記事内容を把握するために重要になってくると考えられる。

本稿 1 で述べたように、『点字毎日』は漢字を用いない日本語点字で表記された新聞である。当然ながら漢語も日本語点字で表記されている。また、墨字の場合は外来語を片仮名で表記することで、ある程度は和語や漢語との区別が可能になっているが、日本語点字の場合は平仮名と片仮名のような文字種の区別がない。いわば、すべての語が平仮名で書かれているのに等しい。ここで疑問として浮かび上がるのが、同音異義語を適切に区別できるのか、あるいは『点字毎日』では同音異義語をなるべく避けるようにしているのか、ということである。語種の中でも漢語は同音異義語が生じやすいといえるが²⁰、漢語が記事理解のポイントとなっている『点字毎日』では、同音異義語の実態はどのようになっているのかについて、本節で調査する。

まずは、先の頻度調査で得られたデータから、語彙素読みが同じであり、語彙素が異なるものの異なり語数を調査した(例えば、『毎日新聞』の対象紙面の中に「こうえん」という読みの語彙素として「公園」と「講演」が出現していれば、2語と数える)²¹。これにより、今回対象とした記事の範囲で同音異義語が存在する語の数が示される。結果は以下の通りである。

『点字毎日』: 異なり語数 737 語 『毎日新聞』: 異なり語数 847 語

『毎日新聞』のほうがやや多いものの、両紙ともに全体の10分の1以上の語が対象紙面に同音異義語が存在する語であった(ただし、本調査では品詞の違いは無視しているため、これらの中には同音異義語であっても品詞が異なるために混乱する可能性が低いもの(例えば「蛙」と「返る」)もある)。その中でも2字漢語が目立ち、両紙ともに70%程度を占めていた。この結果からは、漢字表記のない『点字毎日』でも同音異義語を避けているわけではないといえる²²。

²⁰ ましこ(2003)は、「アイ」「ヨウ」など2拍から成る音読みは音節の種類が少なく「つかわれているおとが、かぎられ、かたよっている」ことを示している(ましこ2003:84)。とすれば、音読みの漢字で構成される漢語も同音異義語を生み出しやすいと推測される。

²¹ 固有名詞および誤解析された結果として出現した語は除いた。

²² ただし、「市立」と「私立」が単独で使われる場合はそれぞれ「いちりつ」「わたくしりつ」と記していた(『点字毎日』2011年7月10日号「せんもんせい きょーいくを いちがんで」)。また、意味理解を助けるための補足が行なわれることもある。『点字毎日』2011年7月17日号掲載記事「さいがいじの じょーほー ほしよーわ」では、シンポジウムでのパネリストの発言に対して「点訳者挿入符」(下の引用では二重かっこで表示)を用い、語の補足をしている。

「わがみをまもるためにわじじよ((みずからたすける))と きょーじよ((ともにたすける))。こーじよ((おおやげがたすける))わやくに たたなかつた」
 なお、2011年発行分の「ないがい もーかい にゅーす」内で点訳者挿入符が使用されたのは、この1例のみである。

具体的に語をみると、例えば「以降」と「意向」は『点字毎日』の同じ記事の中に登場するが、意味や用法が異なり、点字で書かれても文脈で判断することが可能であろう（該当部分を以下に引用する。下線は筆者）。

さいしゅー ねんどわ りよーしゃに こべつに でんわを かけて いこーを
たずね ひつよーに おーじて こべつ たいおーを とるなど さぼーとを
いっそー じゅーじつさせた。 りよーしゃ さぼーとに ついてわ しんねんど
いこーも じゅーしすると いう。²³

なお、初めの下線部が「意向」で、次の下線部が「以降」である。

一方で、「体制」と「態勢」などは意味が類似しており、文脈を適切に捉えなければどちらの語であるかを判断するのは難しいといえる²⁴。ただし、意味の違いがわずかであるため、「体制」の意味であるところを「態勢」と理解しても記事内容の誤解につながる可能性は低い。そのため、読者によっては2語を区別することなく「たいせい」という1つの語であると認識しているかもしれない。

また、文脈からも判断することが難しい例もある。以下の文は、2011年2月6日号掲載記事「まつりの かめんを さわって かんしょー」という、展覧会の紹介記事に登場するものである（下線は筆者）。

また わかやま けんりつ もーがっこーの きょーりよくを えて わかまつりの
れきしや かめんの なりたちなどを かいせつした てんじ ずろくの ほか
てんじ ちらしも つくった。

下線部の「てんじ ずろく」は「点字図録」と「展示図録」のどちらにも解釈できる（あるいは両方の意味をもたせているとも考えられる）²⁵。

このように実際に読者が語を適切に理解できるかどうかという問題は、本調査だけでは推測の域を出ないため、読者へのインタビュー調査などが必要である。これについては今後の課題とする。

4. まとめと今後の課題

本稿では、『点字毎日』「ないがい もーかい にゅーす」欄と『毎日新聞』一面に現れる語の頻度を調査した。その結果を語種別にみると、和語では両紙の上位語に大きな差はないが、漢語と外来語では各紙面の内容を反映する語が上位を占めていることがわかった。一方、同音異義語の数を調査したところ、『点字毎日』も『毎日新聞』と同じ程度に同音異義語が存在し、その中でも特に2字漢語が多くを占めていた。このことから、本稿注22に提示したように明らかに区別ができなかったり誤解が生じるとき以外は、漢語あるいは

²³ 『点字毎日』2011年3月27日号「にってん てーぶ かしだし しゅーりよー」より引用。

²⁴ NHK 放送文化研究所ウェブサイト掲載記事においても「放送の現場でも迷ったり誤ったりしやうい語」として紹介されている。

²⁵ 和歌山県立博物館ウェブサイトによれば、「展示資料を掲載したさわってよむ図録」ということである（<http://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp/sawarukamen/frameset.htm>、参照2015年8月30日）。

同音異義語のある語を避けるということは特に行なわれていないことが確認された。よって、日本語点字という、漢字を使わない表記法が新聞の語彙に影響を与えるということはほとんどなく、『点字毎日』と『毎日新聞』との語彙の相違には表記法ではなく内容の違いが反映されていると考えられる。

もっとも、『点字毎日』は触読校正（点字を触って読みながら行なう校正）が行なわれており、漢字で表記しなければ理解不能な語は使われていないはずである。しかしながら、それは編集者側の判断であり、読者側も記事に関する背景知識のある程度もっていることが前提となっていることは確かだろう。例えば、『点字毎日』の記事の中には「はくじょー」という語が登場するが、視覚障害者福祉に関する知識をもった者であれば、歩行の際に用いる白いつえ「白杖」を思い浮かべることができる。また、「せいもー とわず」という表現が登場するが、これも『点字毎日』の読者が「視覚障害の有無（晴眼か盲か）を問わず」と理解できることを前提としている例であるといえる。

実際に『点字毎日』読者によって適切に語が理解されているかどうかについては、同音異義語の区別も含め、今後の課題とする。

参考文献

- 大河原敏吾（1937）『點字發達史』培風館
- 小木曾智信（2014）「形態素解析」前川喜久雄監修、山崎誠編集『講座日本語コーパス 2 書き言葉コーパス—設計と構築—』朝倉書店
- 佐竹秀雄、岸本千秋（1998）「新聞第一面の語彙—1997年の新聞3紙を資料として—」『武庫川女子大学言語文化研究所年報』第10号、武庫川女子大学
- 中野真樹（2014）「近代点字新聞『点字大阪毎日』のかなづかい—第1号から第25号までを対象として—」『國學院雑誌』第115巻第1号、國學院大學
- なかの・まき（2015）『日本語点字のかなづかいの歴史的研究—日本語文とは漢字かなまじり文のことなのか』三元社
- 日本点字委員会編（2001）『日本点字表記法 2001年版』日本点字委員会
- 羽山慎亮（2009）「点字メディアの歴史と意義」『メディア学』第24号、同志社大学大学院メディア学研究会
- 羽山慎亮（2014）「点字新聞の語彙的特徴」『社会言語学』第14号、「社会言語学」刊行会
- 羽山慎亮、中野真樹（2015）「語種比率・品詞比率からみた現代点字新聞と近代点字新聞の語彙的特徴」『日本語学会2015年度春季大会予稿集』日本語学会
- ましこ ひでのり（2003）『増補新版 イデオロギーとしての「日本」——「国語」「日本史」の知識社会学』三元社
- 「放送現場の疑問・視聴者の疑問 「体制」「態勢」「体勢」などの使い分け」NHK放送文化研究所、2008年9月1日
- <https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/kotoba/gimon/173.html>（参照2015年8月30日）

